

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 石原 由貴

石原由貴氏の論文 *Syntactic Doubling of Predicates in Japanese* (和訳「日本語における述部の統語的反復の研究」) は、移動現象のメカニズムについての近年の理論上の理解にもとづき、日本語における三種類の述部重複構文についての分析を提示したものである。構成素のコピーを作成して併合するのが移動の本質であり、通常、移動前の位置での音形が音韻演算の操作によって消去されるが、もし音形消去が何らかの事情で生じない場合には同一要素の重複的生起がみられるはずであるというアイデアが発想の出発点となっている。この発想自体は、他の言語についての先行研究でさまざまに追究されているものだが、石原氏の博士論文の貢献は、取り上げた構文について詳細な検討を行って、移動現象との関連以外にも談話における役割などについて重要な観察と分析を提出している点にある。

第1章で移動に関する理論と焦点についての意味論を解説した後、第2章から第4章でそれぞれの構文の分析に移るのだが、動詞句焦点分裂文について論じている第2章では、同じく動詞句焦点を許す英語の擬似分裂文と比較しながら、疑問とその答が合体した統語構造において答に相当する部分で省略が起こっているとするのが正しい分析であると結論づける証拠を丁寧にあげ、日本語において話題表現だけで疑問文になることがあるという事実(「太郎は?」など)も巧みに取り込んでいる。部分的に述部の重複が起こる場合は、焦点部分の移動が関わっているのではなく、省略されなかった答えの部分が、疑問文に対応する構造においても使われることを許されているにすぎないと論じている。

第3章では「食べることは食べた」や「食べたことは食べた」のような述部分裂文を取り上げ、述部が繰り返されるのは動詞句(前者)ないし時制句(後者)の移動が生じていると考えるべき根拠を提出している。動詞句移動では接辞の性質、時制句移動の場合は、時制句の上にある構造の要求か、移動距離が短い場合の線状化に対する制約のいずれかが述部重複の原因だとしている。類似するものとして英語の動詞句話題化構文との比較がなされ、日本語と英語では話題化の談話上の役割が異なったタイプに属することが指摘されている。日本語の話題化についての過去の研究では対照的か否かという区別しか論じられてこなかったが、第3章の議論はそれ以外の分類が必要であることを示唆しており、話題化研究におけるあらたな局面をひらく可能性を秘めている。第2章と第3章では、複合述語の詳細な分類が分析の基礎をなしており、この点での評価ポイントも高い。

第4章では関西方言で特に特徴的な述語の反復が主部移動によって生じることを論じているが、この構文が肯定／否定を強調する談話的役割を持つこともあぶり出し、助動詞や否定辞が音韻上の強勢を担う英語の肯否焦点と比較している。

本論文は、英語を含めた他言語の研究の中に日本語の分析を位置づけようとする野心的な試みである。談話／情報構造の中核をなす話題と焦点といった手あかがついているはずの概念について興味深いあらたな論点と経験的データを提供して、研究を大きく前進させたことも特筆に値する。以上、博士(文学)の学位に値すると判断する。